

和歌山県持続性の高い農業生産方式導入指針（追加分）

追－３８ にかうり（施設）
追－３９ ごぼう

平成２２年２月

和歌山県農林水産部

追－38 にがうり（施設）

施設圃場では塩基やりん酸が集積傾向にあり、これら土壌化学性の悪化による土壌生産力の低下や生理障害の発生が認められる。土壌診断に基づいた適正施肥や、完熟堆肥の投入により地力を高めることが大切である。また、発生予察情報を基本に、フェロモン剤利用等により農薬散布の回数削減に努めるものとする。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づいた適切なバークたい肥（C/N 比25以下）の施用を基本とする。 ○塩類集積ほ場では、ピートモス又は稲わらを太陽熱処理時等に施用し、無機養分の流亡を抑制する。 ○緑肥作物利用技術 緑肥を栽培する場合は全量を施肥前にすき込む。 	バークたい肥 2t/10a ピートモス 1 t/10a 稲わら 600 kg/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥施用では、土壌診断に基づいた肥効調節型肥料の施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。 	窒素成分量 24 kg/10a 以下 窒素成分量 30kg/10a 以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 ハスモンヨトウの交信攪乱用性フェロモン剤を処理する。 ○被覆栽培技術 寒冷紗や防虫ネットで施設開口部を被覆し、害虫の飛来を防止する。 ○マルチ栽培技術 白黒マルチをすると雑草防除効果がある。 ○生物農薬利用技術 ハスモンヨトウなどの鱗翅目害虫の防除に BT 剤を使用する ○熱利用土壌消毒技術 太陽熱土壌消毒又は、熱水土壌消毒、蒸気土壌消毒のいずれかを行い、土壌中の有害動植物を駆除する。 	化学農薬使用回数 20%以上削減
その他の留意事項		

（注1）たい肥の施用量はバークたい肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、たい肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作物の吸収パターンを考慮して資材を選択する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。

追－39 ごぼう

堆肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、土壌診断に基づき肥効調節型肥料、有機配合肥料を組み合わせた利用率の向上によって生産の安定化を図る。

また、病害虫の防除では発消長を的確に把握し、適期防除に心懸けるとともに、輪作等の耕種的防除を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断結果に基づいた適切な有機質資材（牛ふんオガクズたい肥等、C/N比20以下）の施用を基本とする。	牛ふんオガクズ たい肥 2 t /10a
化学肥料低減技術	○基肥施用における肥効調節型肥料の施用又は追肥における局所施用を基本とする。 ○有機質肥料を使用する場合は、基肥では全層施用、追肥では局所施用とする。	窒素成分量 18kg/10a 以下 窒素成分量 22kg/10a 以下
化学農薬低減技術	○機械除草技術 刈払い機による除草や管理機等による中耕除草を行う。 ○マルチ栽培技術 有機物マルチ（稲わら、雑草堆肥、牛糞堆肥等）または黒色マルチ等により雑草の発生を抑制する。 ○生物農薬利用技術 BT剤によるヨトウムシなどの防除。 ○被覆栽培技術 寒冷紗、防虫網（1ミリ目）で被覆すると、アブラムシ類、鱗翅目害虫の被害が軽減できる。	化学農薬散布回数 20%以上削減
その他の留意技術	・連作障害を回避するため、同一ほ場での作付を3年間以上休栽する。	

（注1）堆肥の施用量は、県内産牛糞オガクズ堆肥の施用を前提とした目安である。これら以外の品質（N供給能等）を有する資材を施用する場合は、堆肥の品質に基づき施用量を補正する必要がある。

（注2）肥効調節型肥料を基肥とする場合、作型や品種の吸収パターンを考慮して資材を選択し、使用量を決定する必要がある。窒素施用量は1作での全施用量（基肥＋追肥）の上限の目安である。前作の施肥窒素が残っている場合は土壌診断を行い、診断結果に基づき施用量を決定する。

（注3）ナタネ油粕等加里含量の低い有機質肥料を施用する場合、他の資材で加里含量を補正する必要がある。追肥での局所施用とは穴肥や条施用であり、肥料を土壌で覆うことが望ましい。